

まず、予め行った血清中ATLV抗体テストでその抗体陽性のサルを選択した(表1)。ニホンザル(2頭)、ヤクザル(2頭)、タイワンザル(2頭)、ボンネットザル(2頭)、ベニガオザル(2頭)及びブタオザル(1頭)である。これらの6種11頭の各々の個体から、末梢血リンパ球を分離して、この短期培養を行い、ATLA(ATLV特異的抗原)抗原の検出を試みたところ、ニホンザルの2頭、ヤクザル、タイワンザル、ボンネットザルの各1頭、計6頭にATLA陽性の培養細胞を検出できた。次に、長期培養細胞株の樹立を目的とした培養を行った。二つの方法をとった。第一はインターロイキンⅡを添加する方法、第二は正常ヒトリンパ球との混合培養法である。次のような実験結果を得た。すなわち、7頭のサルより14株のATLA陽性細胞株の樹立に成功した。このうち染色体が分析を行った8株中4株はヒト細胞、そして3株はサル細胞、他はヒトとサルの混合系であることが判明した。14株のATLA陽性細胞の陽性率は11~790%である。また、免疫グロブリン産生と血球レセプターという二つのマーカーからみると、5株は明らかなT細胞で、1株は明らかにB細胞であったが、他は非T非B細胞であった。

サルに見られる成人T細胞白血病ウイルスに関する研究②

山本興太郎(東医歯大・雑研)

現地採取の各種霊長類血清におけるヒトT細胞白血病ウイルス(HTLV)関連抗原(ATLA)に対する抗体を検索し、自然環境下のHTLVもしくはその近縁ウイルスの伝播の範囲、様式及び関連疾患の解明を目的とする。

日本国内で飼育されている日本ザル以外の各種霊長類血清の検索は、HTLV特異抗原であるATLAに対する抗体が原猿・新世界ザルには見出されず、旧世界ザル(オナガザル属・マカク属)・類人猿(チンパンジー属)に限られるという結果を示した(Int. J. Cancer 33, 179-183, 1984)。

今年度は、現地採取のミドリザル(エチオピア)、マントヒヒ(エチオピア)、アラビスヒヒ(エチオピア)、マントヒヒ×アヌビスヒヒ雑種(エチオピア)、ゲラダ(エチオピア)およびトクモンキー(スリランカ)の血清を検索した。その

結果は次の通りであった。

ミドリザル(♂, 33/112; ♀, 11/53: Total 44/165)

マントヒヒ(♂, 8/133; ♀, 20/232: Total 28/365)

アヌビスヒヒ(♂, 5/24; ♀, 2/16: Total 7/40)

マントヒヒ×アヌビスヒヒ雑種(♂, 20/54; ♀, 11/46: Total 31/100)

ゲラダ(♂, 0/82; ♀, 0/67: Total 0/149)

トクモンキー(♂, 12/58; ♀, 14/69: Total 26/127)

これらの結果に、年令、性別不明のサンプルの検索結果を加えると、ミドリザル(54/193; 28.0%), マントヒヒ(28/405; 6.9%), アヌビスヒヒ(14/134; 10.4%), マントヒヒ×アヌビスヒヒ雑種(36/119; 30.3%), ゲラダ(0/149; 0%), トクモンキー(28/154; 18.2%)であった。

以上の結果から、前回(I. J. C.)陰性の結果であったマントヒヒとアヌビスヒヒは現地で陽性であること、両者の雑種も陽性であり頻度が高いこと、トクモンキーも現地で陽性であり、ミドリザルとゲラダは現地でも各々陽性と陰性であることが判明した。

サルに見られる成人T細胞白血病ウイルスに関する研究③

速水正憲・辻本 元・石川晃一(東大・医科研)

ヒト成人T細胞白血病(ATL)の原因ウイルスとしてATLVが分離されている。最近このATLV又はこれに極めて近縁のウイルスがニホンザルにも自然感染していることが報告され、ヒト・サル間におけるATLV感染の可能性が示唆された。そこで我々はニホンザルにおける抗ATLV抗体分布状況を調査し、ヒトにおける分布と比較して、ヒト・サル間のATLV感染の可能性につき検討を行った。霊長研野澤教授が収集、保存されていた日本各地計41群の野生ニホンザル血清2650検体につき、ATLV産生ヒト細胞株MT-1を抗原とする間接蛍光抗体法により抗ATLV抗体の検索を行ったところ、670検体(25%)に